

# 難波



題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

## 第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」

2006年5月13日（土）

会場：関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

2006年5月13日に、第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」が開催されました。ワークショップは、市民の方々に、さまざまな体験を通じて、大阪の文化遺産を知ってもらうというもので、第1回目となる今回は、当センターの研究協力者である小野功龍先生が理事長をしておられる天王寺楽所雅亮会をお迎えして、大阪が世界に誇るべき文化遺産ともいえる天王寺舞楽を広く紹介し、その魅力を知ってもらおうと企画されました。

天王寺舞楽は、14世紀に吉田兼好が著した『徒然草』（二二〇段）の中で、「何事も刃土は賤しく、かたくななれども、天王寺の舞楽のみ都に恥ぢずといふ」（何事も、田舎のものは下品で見苦しいものであるが、四天王寺の舞楽だけは都の風物に恥じないものだという）と評されているほどです。

### 天王寺楽所と雅亮会

舞楽とは、舞踏と音楽とで構成され、舞をまう人を「舞人」、演奏をする人を「管方」や「楽人」といいます。「左方」と「右方」にわかれ、左方では唐楽を、右方では高麗楽を用います。装束でも、左方は赤色系統を用い、右方は緑色系統を用います。

舞楽は、主に「楽所」といわれるグループによって担われてきました。楽所には、宮中（京都）の「大内楽所」・南都（奈良）の「南都楽所」・四天王寺（大阪）の「天王寺楽所」があり、まとめて「三方楽所」と呼ばれました。

天王寺楽所は、中世以降、他の楽所が衰退する中でもその伝統を継承し続けてきました。明治天皇が東京に移ったことで、三方楽所の楽人たちも東京に呼び寄せられることになり、天王寺楽所は解体の危機に陥りました。天王寺楽所の伝統の消滅を惜しんだ小野樟蔭氏は、大阪に残っていた楽人や民間の篤志家を集め、天王寺舞楽の再興を図り、1884年（明治17）に「雅亮会」が設立

されたのです。第二次世界大戦で、多くのメンバーを失い、戦火によって装束や楽器をも消失するという悲劇に見舞われましたが、その伝統の保持を望む人々によって支えられて、今日に至っています。現在は、四天王寺で4月22日に営まれる「聖霊会舞楽大法要」や、8月初旬の「篝の舞楽」、10月22日の「経供養の舞楽」のほか、住吉大社で5月の最初の卯の日に行われる「卯の葉神事」や秋の観月祭での演奏をはじめ、11月下旬には大阪フェスティバルホールで公演会を催しています。また、国内にとどまらず、アメリカや韓国、ヨーロッパ各国など海外公演も行われています。

天王寺舞楽、とりわけ聖霊会舞楽は、1976年（昭和51）、国の重要無形民俗文化財に指定され、大阪を代表する文化遺産であるとともに、わが国を代表する文化遺産として広く国内外に知られています。



小野先生の解説による「舞楽と管絃」

### 雨の中130名もの参加者が

前日までの好天が嘘のように、当日は朝から雨模様。今回のワークショップの目玉は、この日に命名されたセンター棟前「なにわ広場」の特設舞台での「萬歳楽」の公演であるだけに、誰もが、雲が晴れることを願っていました。受付開始時間の正午になっても、雨は止むどころか、むしろ雨脚は強まるばかり。これでは、参加者の

足も鈍るのではないかと心配されましたが、その心配は受付開始後すぐに解消されました。

今回は、一般の方に広く参加してもらおうということから、通常の案内チラシはもちろんのこと、新聞や地域の情報誌にも広報し、センター行事として初めて定員100名の往復はがきによる事前申し込み制としました。最終的には160名余りの応募があり、やむなく抽選となりました。当日の参加者は、センターや学内の関係者をあわせて130名で、うち一般応募の方は、75名でした。雨中にもかかわらず、今回のワークショップの関心の高さを実感しました。

## 第一部 聖霊会ビデオ上映 舞楽と管絃

13時の開会の辞のあと、高橋センター長によるあいさつと雅亮会の紹介につづき、いよいよワークショップ「天王寺舞楽の魅力」第一部の始まりです。第一部では、聖霊会舞楽大法要のビデオ上映と、舞楽で用いる楽器の解説が行われました。

聖霊会舞楽大法要は、毎年4月22日に四天王寺六時堂で、聖徳太子の尊像を安置して執り行われる聖徳太子の忌日法要で、舞楽の間に法要が織り交ぜられながら進行していきます。『吉野吉水院楽書』には、安貞2年(1228)に四天王寺聖霊会を実見した記録が残されており、現在でも演じられる舞楽の演目が見られることから、この頃には現在と変わらない姿で聖霊会が執り行われていたことがわかります。18世紀末の寛政年間に刊行された『摂津名所図会』には、その様子が大きく掲載され、天王寺舞楽は大坂見物の一大名所として武士から庶民に至るまで幅広い人気を集めていました。

センター棟1階の文化遺産実習・展示室のスクリーンに聖霊会の様子が映しだされると、雅亮会理事長小野功龍先生の解説が映像をさらに引き立たせます。聖霊会をはじめ、雅亮会の演奏では必ずといっていいほど、演目の前に小野先生による解説がありますが、わかりやすく丁寧な解説とその名調子は、天王寺舞楽の魅力のひとつといっても過言ではありません。そうした意味で、センターでの聖霊会の上映と小野先生の解説は、まことに贅沢な空間の再現といえるでしょう。参加者の方々がビデオに見入っている姿は、非常に印象的でした。

40分ほどのビデオ上映の後、「舞楽と管絃」と題して、楽器の紹介と解説に移りました。今回のワークショップでは、「打ち物」に3名、「吹き物」に6名の合計9名の楽人の方がご参加くださいました。9名の楽人の方々が装束をつけ、実習・展示室の舞台上に敷かれた赤毛氈の上にお座りになると、先ほどまでとはまた違った雰囲気

気になります。<sup>かつこ</sup>鞆鼓・<sup>しょうこ</sup>太鼓・<sup>ほうしょう</sup>鉦鼓の打ち物と、<sup>ひちりき</sup>箆・<sup>りゅうてき</sup>龍笛の吹き物それぞれについて、小野先生の解説と実際の演奏を交えながら紹介され、最後にアンサンブル演奏の音色がセンターに響き渡る頃には、参加者の方々はすっかり天王寺舞楽の世界に惹きこまれていたのではないのでしょうか。舞楽の楽器については、演奏前に吹き物のリードを湿らせるための湯茶や、笙を温めるために演奏中に電熱器が必要であったりと、これらは舞楽を見る側では気づかないことで、準備する側になってはじめて知る発見もありました。

## 第二部 襲装束の解説と着付け 舞楽の所作解説 萬歳楽

当初の予定では、第二部は会場をなにわ広場の特設舞台に移動して、屋外での公演を計画していたのですが、あいかわらず窓外では雨が降り止まず、とりあえず所作解説までは室内で行い、雨の状態を見て、萬歳楽だけでも屋外で、ということになりました。そうなるも舞台は180度回転し、実習・展示室の畳敷き部分になるということで、第一部終了後の休憩時間にイスを撤収し、大型の赤毛氈を床に敷き、後方をイス席にするという大掛かりな会場の組み直しが行われました。研究員の先生方をはじめスタッフ一同の一致団結した動きで、何とか舞台転換を済ませ、第二部がスタートしました。

萬歳楽などの武具を持たずに舞う<sup>ひらまい</sup>平舞の装束は、「<sup>かまね</sup>襲装束」と呼ばれ、<sup>しやうぞく</sup>鳥甲・<sup>とりかぶと</sup>袍・<sup>ほう</sup>半臂など10種類の装束からなります。第二部の開始とともに、畳部分の幕が開かれ、衣紋掛けにかけられた<sup>あかのおおくち</sup>袍や赤大口などの鮮やかな色彩が人々の目を奪いました。小野先生の解説にしたがって、舞人の方に一枚一枚装束が着付けられ、最後に鳥甲の紐を顎に結び、襲装束の完成です。こうした装束の着付けなどは、今回のワークショップならではの趣向であるといえます。そのまま今度は舞楽での所作のレクチャーです。<sup>ずりて</sup>出手、<sup>かきあわせ</sup>掻合、<sup>かきよせ</sup>掻寄などの実演をまじえての解説はわかりやすく、なかには同じようにその所作をする参加者の方もいらっしゃいました。

襲装束や所作の解説が実習・展示室で行われている間、激しく降っていた雨が上がり、空も明るくなってきました。祈りが天に届いたとばかりに、屋外の会場設営のため、パイプイスを並べかけた瞬間、無情にも再び雨が降



色鮮やかな  
ほう  
袍の着付け





二人舞による萬歳樂

り始め、萬歳樂も室内で行うという決断がなされました。

萬歳樂は、隋の煬帝<sup>ようだい</sup>が作らせたとする説や、唐で賢王の治世には鳳凰が飛来して「賢王萬歳」とさえずるとされ、その声を樂に、その姿を舞にしたとする説など、その成立についてはさまざまですが、古来より天皇の即位などの祝い事には必ず舞われるものです。今回のワークショップが、センター棟竣工記念を兼ねていたため、すばらしい饞<sup>はなむけ</sup>の演目だといえます。本来は左方の四人舞ですが、今回は二人舞で演じられました。樂人の方々が再登場し、ほどなく龍笛や箏樂などの音色とともに萬歳樂の公演が始まりました。天王寺舞樂の魅力にすっかり魅了された参加者の中には、うっとりとして鑑賞されている方もおられました。およそ20分の萬歳樂の公演が終わると、鳴り止まない拍手の中、小野先生のまとめと藪田総括プロジェクトリーダーの閉会あいさつをもって、センターの記念すべき第1回ワークショップ「天王寺舞樂の魅力」は終了しました。

### ワークショップを終えて

ワークショップ終了後、参加者の方々に今回の感想を記入していただきました。そのいくつかを紹介すると、「舞樂を初めて見て、解説も丁寧だったので初心者でもよく理解できた」といった感想が多く見られ、今回、初めて舞樂に接する方が多かったようです。また、「今まで報道・書画でしか見聞していなかったが、今日は現物のものが見聞でき貴重な経験ができた」、「ライブでの鑑賞ははじめてだったが、大変楽しく舞樂の魅力にますます興味を持った」、「今まで時々舞樂を見る機会があったが、何もわからずみていた。次回は今回の公演を参考に見たいと思う」といった感想もありました。天王寺舞樂については、「天王寺舞樂のことは聞いていたが、こんなに魅力的とは思っていなかった。ぜひ本物を見てみたい」、「四天王寺近くに住んでおり参拝はしていたが、このような素晴らしい舞樂は知らなかった。身近なところ

にこんな遺産がある事を知り心豊かになった」、「四天王寺へも行ってみたいと思った」といったものや「小野功龍先生の解説が最高でした」といった感想もあり、小野先生の解説も天王寺舞樂の魅力のひとつであることを参加者の方に実感していただけたようでした。今回のワークショップでは、初めての試みとしてA4判10頁立ての『鑑賞のてびき』という小冊子を作成しましたが、これについても「鑑賞のてびき」もよく理解できるように工夫され引き続き舞樂を見るとき参考になる」といった感想をいただきました。一方で、「樂器の説明の時全然見えなかったのが残念だった」、「スクリーンが低く会場が狭いので大変見づらく残念だった」といった感想もあり、今後の行事では改善していかなければならないと思います。

今回のワークショップでは、今までの行事にないほどの入念な打ち合わせを重ね、本番を迎えました。それだけに、なにわ広場の特設舞台での公演が実現できなかったことは悔しいかぎりなのですが、第1回ワークショップ「天王寺舞樂の魅力」は、多くの方々の力を結集していただき、成功させることができました。屋外の特設舞台では、日本ステージの湊さんとスタッフの方々、大阪装備の松岡さんとスタッフの方々が、前日の設営から当日の雨の中、何とか屋外公演を実現させるために最善を尽くしてくださいました。また、日ごろからセンターのお世話をしてくださっているO.B.S.の方々は、特設舞台の搬出・搬入や当日の会場設営など、センターのスタッフだけでは手が足りない部分を実に手際よくお手伝いくださいました。さらに、大学内のさまざまな部署には機材の貸し出しなどのお世話をいただきました。そして何よりも、理事長の小野功龍先生や理事の徳山耕一さんはじめ天王寺樂所雅亮会のみなさんには、今回の企画を快くお引き受けくださり、記念すべきセンターの第1回ワークショップを最高のものとしてくださいました。今回のワークショップを担当した者として感動と感謝の言葉あるのみです。

最後になりましたが、今回のワークショップでお世話になったすべての方々に、厚くお礼申し上げます。

(文責：歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 櫻木 潤)

第1回ワークショップ「天王寺舞樂の魅力」の様子は、5月14日付けの「朝日新聞」朝刊や「大阪日日新聞」で紹介され、5月15日には吹田ケーブルテレビジョンで放映されました。

## 第3回 NOCHS レクチャーシリーズ 「近世大坂の学芸」

2006年6月24日(土)

会場：関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究中心

2006年6月24日(土)、当センター文化遺産実習室・展示室において、第3回 NOCHS レクチャーシリーズ「近世大坂の学芸」が開催されました。

今回のレクチャーシリーズでは、近世大坂の学芸遺産として、上方役者絵と当センター平成17年度新収資料「長島侯増山雪齋独楽園賀詞帖」を取り上げました。この資料は、長島藩主増山正賢(雪齋)が独楽園と称した庭園を造った際、贈られた賀詞を折本に仕立てたものです。賀詞を贈った文人には、木村兼葭堂や十時梅屋など、近世大坂の文人の名前が見られ、交流の一端を垣間見ることができます。

これらの資料にかかわって、Andrew Gerstle (アンドリュー・ガーストル) 氏(ロンドン大学 SOAS 教授/国際日本文化研究センター研究員)と水田紀久氏(元関西大学教授/木村兼葭堂顕彰会代表)にご講演いただき、近世大坂の学芸について考えるよい機会となりました。

当日はまた、「長島侯増山雪齋独楽園賀詞帖」の展示・公開をおこない、学芸遺産研究プロジェクト研究員有坂道子氏による釈文を配布いたしました。参加者は、49名でした。

### 女形の身体を描く —三ヶ津の浮世絵肉体表現を問う—

ロンドン大学 SOAS 教授  
/ 国際日本文化研究センター研究員  
Andrew Gerstle

上方文化を研究しながら、いつも不思議に思うことがありました。それは、関西の人々は一般的に自分たちの固有の文化に対して、それほど興味がないように感じられることです。このことは特に大阪に言えると思います。戦後、出版その他のメディアがほとんど東京に集中し、近世日本のイメージは東京のルーツである江戸が独占するようになってしまいました。その結果、一つの文化圏を形成した大阪の伝統文化が、地方文化の一つとしてしか見えなくなったのは残念なことです。

さて私は、上方文化について研究を始めて以来、画像資料を中心に役者のパフォーマンスを対象として研究を進めてきました。役者絵つまり浮世絵を考えると、一

般的にはいわゆる江戸絵が浮かんできます。勝川春章・勝川春英・歌川豊国・東洲斎写楽などの役者絵を見たことのない日本人はないでしょう。また江戸絵に描かれた人物の様式美が普遍的であるとも一般的に考えられるでしょう。

しかし、研究を進める中で、日本の人物画、特に肉体表現についていくつか単純な疑問が湧いてきました。それは上方の人物像と江戸の人物像にはそれぞれ別の伝統があり、基本的にかなり違うのではないかという疑問です。

歌舞伎役者の似顔絵は、江戸では1770年頃、勝川春章や一筆斎文調から発展しますが、そこでは女形は立役と違って似顔絵ではなく、美人画あるいは若衆の範囲でしか描かれませんでした。それが24年後の1794年、寛政頃になって、東洲斎写楽や勝川春英によって初めて江戸で若女形を男として意識的に描かれるようになりました。

しかしながら、1780年代の大坂ではすでに流光齋如圭が女形を男として、生々しく写實的に描いています。このことは従来の浮世絵研究では取り上げられませんでした。

このような流光齋の写実性の由来については、円山応挙をはじめとする四条派の写生、つまり実際の動物・植物・人間を観察して描くということや月岡雪鼎の美人画あるいは艶本の挿絵で見られる肉感的な筆致に求められるのではないかと考えています。

これまでの浮世絵研究においては、江戸絵に重点が置かれてきました。しかし、流光齋から春英あるいは写楽に与えた影響や、流光齋の肉体表現が江戸浮世絵の流れよりもむしろ四条派や月岡雪鼎など上方の美人画・人物画の伝統によるものである可能性を考えると、浮世絵における人物像の流れに上方絵も入れたほうがおもしろいのではないかと私は思います。





## 同床同机

—増山雪齋侯と木村兼葭堂—

元関西大学教授 / 木村兼葭堂顕彰会代表

水田 紀久

増山雪齋侯にはお墓がございませんが、東京の寛永寺の境内にある「虫塚」が雪齋侯の墓碑代わりに充分なるでしょう。「虫塚」は雪齋が写生に使った虫類の霊をなぐさめるため、文政4（1821）年に建てられたもので、碑文は儒学者葛西因是の手になるものです。

碑文は「其入也號括囊小陰、其出也號石顛道人、…」  
(其の入る也、括囊小隱と號し、其の出る也、石顛道人と號す) で始まり、雪齋侯の人柄について書かれています。

雪齋侯はひとりでいるときは「括囊」。まるで袋の口を括ったような慎ましい暮らしぶり、童子を使って蝶々やら蜂やら、写生のために虫を採集しています。蝶やカミキリムシが写生されている『虫笏帖』は雪齋侯が描いた絵としては代表的なものです。

それで虫の亡骸を布張りの袋に入れて、これは棄ててしまふに忍びない、自分の友達みたいなものだから葬ってやりたいと思っていたというんです。そういいながら在世中はできなかったものですから、雪齋侯が亡くなってから江戸の文人たちにより「虫塚」が建てられました。

また雪齋侯は人と会うときは「石顛」。つまり石には目がなくて、どんな高くても好きな石は買うというんです。大窪詩仏『詩聖堂詩集』にも「老侯老来號石顛、愛石不惜擲金錢」（老侯老来石顛と號す、石を愛して惜しまず金錢を擲つ）と書いてございます。雪齋侯の石バカは有名だったんでしょうね。一方の木村兼葭堂は、娘の養子問題で頭を悩ませています。そのことと体調を悪くしたのが重なって、寛潤著『三教放生弁惑』の序文がなかなか書けなかったり、『兼葭堂雜録』に載っている兼葭堂の顔が気難しく描かれているのでしょう。

兼葭堂は雪齋侯に「独樂園」に寄題する賀詞を寄せ、雪齋侯は「兼葭堂墓碑銘」の碑文を書き、その中で今回の講演のタイトルのもととなった「常同床而臥、同机而語」（常に床を同じくして臥し、机を同じくして語る）と書いています。これらのことから垣間見える雪齋侯と兼葭堂の交流がどのようにして始まったのかについては、今後の課題でしょう。

（文責：学芸遺産研究プロジェクト R.A. 松本 望）



「独樂園賀詞帖」に見入る参加者

### アンケートより

- ・とても有意のシリーズの様で、時間を作って次回を楽しみにしている。
- ・研究的には難しい内容だと思うが、楽しく聞くことができた。
- ・充実した内容でよかった。二講演がより近接したものであればもっとよかったのではないかな。
- ・大変興味深く聞くことができた。
- ・兼葭堂の交流を通じて人物像の一面を理解できた。

アンケートにご協力いただいた皆様、  
ありがとうございました。

『難波渦 No3』P8「なにわ・大阪文化遺産学研究センター今後の予定」6月24日（土）第3回 NOCHS レクチャーシリーズの講演者紹介の箇所、水田紀久氏の肩書きが「木村兼葭堂記念会代表」となっておりましたが正しくは「木村兼葭堂顕彰会代表」です。訂正の上、お詫び申し上げます。

## 研究室だより

2006年度第1回祭礼遺産研究例会

藤井 裕之 (吹田市立博物館)

「異形のはきもの—大阪府内の事例を中心に—」

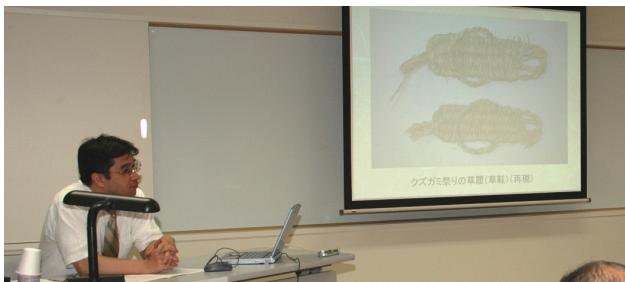
2006年7月1日 (土)

普段は何気なく使われている生活用具が、祭礼行事の中では、特別な意味を込めて用いられることがあります。2006年度第1回祭礼遺産研究例会では、祭礼で使用される履きものをテーマとして、藤井裕之氏による発表が行われました。

履きものは本来、足が汚れないようにするため、もしくは防寒のためなど実用的な用途や、服飾の一部として装飾的な用途を持つものですが、祭礼の場で用いられる履きものには、そういった機能面からは説明のつきにくいものがみられます。藤井氏によれば、これらの「非実用的な履きもの」の持つ意味については、履きものが用いられる行事の背景などから考察していくしかないとのこと、大阪の事例を中心に、藤井氏が調査したさまざまな履きものを紹介していただきました。

藤井氏によると、祭礼において使用される履きものは3種に大別され、それぞれ①司祭者が履いて神事を行うもの、②集落や家の境界にさげて悪霊の侵入を防ぐもの、③境界の祭場に祭祀の対象となるもののために供えるもの、と位置づけられるそうです。藤井氏は、①については吉志部神社(吹田市)のどんじ祭の稚児が履く草履と、石津太神社(堺市)のヤッサイホッサイで祭神エビスサンが履く草履、野里住吉神社(大阪市西淀川区)の一夜官女祭で用いられる緒太草履をぶとを紹介し、③では旧菅原神社の宮座(泉大津市)のクズガミ祭の事例を挙げました。

これらの履きものは、草履のかかと部分が輪になっていたり、海老や魚の尻尾のような形をしていたりするものがあります。他にも、かかと部分がない「足半」あしなか形式のものや、わざと最後まで編まずににおいてあるものもみられるなど、一般的な草履とは異なった、不思議な形をしています。これらについて藤井氏は、神や稚児など、祭礼における聖なる存在が汚れることのないようにするためのものという意味を持つことや、集落の境界に設置されて、魔除けとして、または神を送り迎える象徴としての意味を持つということを説明されました。



(文責：R.A. 内田 吉哉)

2006年度第1回生活文化遺産研究例会

森 隆男 (関西大学文学部教授)

「モノづくりの今」

吉田 晶子 ((財)枚方市文化財研究調査会)

「大阪の鋳物業—近代化以前の職種と技術—」

2006年7月29日 (土)

昨今「モノづくり日本」の根幹が揺らいでいます。後継者不足は深刻さの度合いを深め、生産拠点は、中国をはじめとしたアジアへの移転が進んでいます。2006年度第1回生活文化遺産研究例会では、そんな「モノづくり」にスポットをあてた報告が行われました。

森隆男氏の報告では現在のモノづくり事情が、いくつかの例を挙げながら述べられました。たとえば、東大阪宇宙開発協同組合が取り組んでいる「まいど1号」です。これは50cm四方の立方体に太陽電池を取り付けた人工衛星で、2007年秋の打ち上げを目指して開発が進められています。中小企業が主体となり、その技術をもって人工衛星を打ち上げることで、町工場の高い技術をアピールするとともに、後継者不足などの危機を社会に知ってもらうきっかけにもなっているそうです。そのほかにも、自動車生産現場での技術継承やマイスター制度などが話題にあがっていました。

吉田晶子氏は、写真と図面を交えて鋳物の技術と鋳物師の営業についての解説、そして鋳物業の研究として、民俗学、文献史学、歴史考古学のこれまでの成果と今後の研究課題について言及されました。なかでも、文献史学からのアプローチとして、近世の鋳物師と真継家まつぎとの関係について、笹本正治氏の「真継家配下鋳物師人名録」を基礎に、大阪府内を河内国、和泉国、摂津国(在郷)、大阪市中の4地域に分け、それぞれの鋳物師の居住地や人数、真継家との関係、職分の相違などを比較し、職能集団である鋳物師としての共通性と地域差について考察されました。摂津国、和泉国は株仲間が組織され、河内国にはその動向がなく、真継家との関係も比較的密接であり、また、大阪市中を含む摂津国、和泉国では新規参入者の参入により鋳物師数が増加し、そのことでの競争が激化したということです。鋳造業には、日常生活用鉄製品の鋳造と鐘などの青銅製品の鋳造の二つがあり、在郷では、古くから鋳物業を営むものは両方可行ない、新規参入者は前者に制限され、また、大阪市中では両者が分化し、特に後者は真継家との関係も希薄だったようです。

今後は製品、工房へのアプローチから都市の鋳物業の復元をめざしているということです。

工業品や工芸品に限らず、農業や林業なども含めた「モノづくり」には長年の経験と知恵が必要になってきます。そんな技術を文化遺産として保持・継承していくために今すべきことは何か。危機感を持って考えなければならない時期にきているのかもしれない。

(文責：R.A. 宮元 正博、千葉 太朗)



**2006 年度第 1 回学芸遺産研究例会**

内海 寧子 (祭礼遺産研究プロジェクト R.A.)

「大坂代官竹垣直道の名所見物

—『代官竹垣直道日記』を読む—

有坂 道子 (京都橘大学文学部助教授)

「伊勢長島藩主増山雪斎の文人交流

—『独楽園賀詞帖』に見る—

2006 年 6 月 3 日 (土)

**2006 年度第 1 回研究例会**

南谷 恵敬 (四天王寺国際仏教大学教授)

「四天王寺の信仰と芸術」

2006 年 7 月 7 日 (金)

内海報告では、『なにわ・大阪文化遺産学叢書 2』として刊行予定の「大坂代官竹垣直道日記」を素材に報告されました。日記の著者である竹垣直道は天保 11 年から 9 年間大坂代官を務めた人物で、日記には代官の職務にかかわることだけでなく、書籍貸借や名所見物、逸史や論語の講釈など文化的活動に関する記述も見られます。本報告は名所見物に焦点を当てて考察がなされました。

竹垣が行った見物先や、代官の職務と名所見物の相関関係、見物先での竹垣の趣味嗜好など、名所見物にかかわる行動の一端が明らかにされました。

有坂報告では、平成 17 年度新収資料の「長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖」(以下賀詞帖)について報告されました。当資料は、伊勢長島城内に新造された庭園「独楽園」に寄題する賀詞を折本に仕立てたもので、長島藩 5 代目藩主増山正賢(雪斎)の求めに応じた 37 名の文人の賀詞が収められています。

報告ではまず賀詞を贈った文人について紹介されました。「寛政の三博士」の一人である柴野栗山を筆頭に、木村兼葭堂や十時梅屋、片山北海など近世期大坂で活躍した文人、あるいは江村北海、赤松滄洲、皆川淇園など京都で活躍した文人の名前が見え、賀詞を寄せた文人のほとんどが京坂の文人であることがわかりました。

また、賀詞帖に収められていない賀詞が存在するという指摘や、漢詩人市河寛斎の曾孫である市河三陽の著書『市河寛斎先生』に賀詞を見たとの記述があることなどから賀詞帖の成立に関しても言及されました。

「大坂代官竹垣直道日記」と「長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖」。形態は違いますが、いずれの資料も武士の文化的活動や近世の大坂における人びとの交流の一端を垣間見ることができます。当時の文化的状況を考察する際、どのような交流を持っていたのかが重要になってきます。それぞれの資料について研究を深めることによって、近世大坂の文化的環境の新たな一面が見出せることが期待できるでしょう。

(文責：R.A. 松本 望)

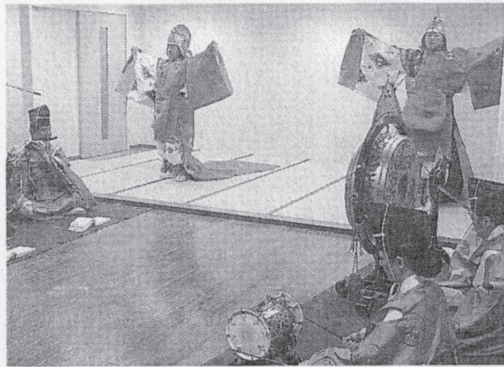
四天王寺は、大阪を代表する寺院のひとつですが、その歴史を知る人は、意外と少ないものです。歴史資料遺産研究プロジェクトの今年度第 1 回の研究例会は、当センターの研究協力者で、四天王寺執事である南谷恵敬氏に「四天王寺の信仰と芸術」と題してご報告をいただきました。

四天王寺は、崇仏・廃仏の争いとされる蘇我氏と物部氏の戦の際に、蘇我氏側にあった聖徳太子が仏法の守護者である四天王に戦勝を祈願したことを契機として、6 世紀後半に創建されました。敬田院(修行道場)、施薬院・療病院(薬局・病院)、悲田院(身寄りのない人を集めて労働をしてもらう)の「四箇院制」をとり、聖徳太子創建の寺として、歴代の天皇や貴族の庇護を受け、大寺として崇敬を受けていました。承和 3 年(836)に落雷によって塔が破壊されたことを皮切りに、織田信長と本願寺の争い、大坂冬の陣など、天災や兵火の被害をたびたび受けたものの、その都度、復興されてきたことは、四天王寺がいかにかに人びとから崇敬を集めてきたかを知る証であると感じられます。

四天王寺の信仰を支えてきたのは、大きく分けて、「太子信仰」、「浄土信仰」、「舍利信仰」の三つで、それぞれに信仰を示す宝物が、今なお四天王寺に伝えられています。太子信仰にまつわるものとしては、「七種の宝物」と呼ばれる、「丙子淑林剣」など太子ゆかりの七つの宝物のほか、太子の肖像や絵伝類が知られます。平安時代に、四天王寺は天台宗の寺となりますが、天台密教の両界曼荼羅は、後白河法皇の灌頂との関わりを思わせます。また、天台浄土教の影響を受け、西門周辺は「日想観」の道場として、念仏を唱える声が響き渡るようになります。阿弥陀如来及び両脇侍像は浄土信仰を代表する宝物です。天台宗の根本經典である法華経を扇に書いた扇面法華経は、国宝に指定される四天王寺を代表する宝物で、女性の信仰を示します。四天王寺には、釈迦の舍利が飛来したとか、太子が手中に舍利を持っていたとする伝承があり、現在でも毎日「お舍利出し」が行われ、舍利信仰も盛んです。石鳥居の扁額には「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心」とあり、舍利信仰と浄土信仰の両方を示す内容で、どちらも四天王寺の信仰の大きな精神的支柱であったことがわかります。

当日は、宝物の一点一点について、スライドを用いて、丁寧にご説明をしてくださいました。南谷氏の熱いながらも穏やかな語り口に、氏のお人柄に魅かれるとともに、まだまだ四天王寺について取り組むべきテーマがあることを認識しました。

(文責：R.A. 櫻木 潤)



天王寺舞楽を舞う天王寺楽所雅亮会のみなさん＝吹田市の関西大学で

聖徳太子(574-592)の仏教伝来に起源を持つ国の重要無形民俗文化財「天王寺舞楽」を大阪の文化遺産として広く市民に知ってもらおうと、吹田市山手町3丁目の関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所で舞楽が披露され市民ら約1200人が観賞した。同センターは文科省の学術高度化推進事業として

# 天王寺舞楽 地域に発信

吹田 埋もれた文化に光

## 切り抜き帳

第1回ワークショップ「天王寺舞楽の魅力」は、新聞記事でも紹介されました。

(朝日新聞提供) 平成18年5月14日(日)  
朝日新聞大阪版・朝刊29面

天王寺舞楽は、四天王(大阪市天王寺区)で太子の命日に催す聖霊会などの法会に奉納される舞楽。この日は、伝統を受け継ぐ「天王寺楽所雅亮会」の小野功龍理事長が、舞楽の歴史、笙や篳篥などの楽器、襲装束などを一つ一つ実物を見せて解説したあと、「萬歳楽」を披露した。高橋隆博・同センター長は「世界的に優れているのに一般には余り知られていない文化遺産が大阪にはまだまだ多い。今後埋もれた『なにわの文化』に光を当て、地域社会に発信していきたい」と話している。

## 施設の紹介

なにわ・大阪文化遺産学研究所1Fにある文化財保存処理分析作業室を紹介します。ここには右のX線透過撮影装置があり、文化財では、特に金属製品などのオリジナルな面の確認、象嵌や繊維付着の有無の検証などに利用でき、さらには製作技術の解明や復元をおこなうことも可能です。

将来的にはX線撮影データから得られた情報で製作技術の復元や金属製品以外での使用、さらにこの装置の新たな利用方法についても考えていきたいと思えます。



2006年度より、新たに研究協力者が加まりました。

- 木庭 元晴 (関西大学文学部教授)
- 伊藤 健司 ((財)元興寺文化財研究所)
- 川本 耕三 ((財)元興寺文化財研究所)
- 尼子 奈美枝 ((財)元興寺文化財研究所)

## 編集後記

『難波潟No.4』をお送りいたします。なにわ・大阪文化遺産学研究所では、今年度初めてワークショップを開催しました。第1回目にふさわしく、天王寺楽所雅亮会による「天王寺舞楽・萬歳楽」。あざやかな衣装を身にまとう舞人の舞と、雅楽が奏でる美しい音色は、来場者を魅了してやみませんでした。

『難波潟No.4』より、デザインを一新して、みなさまにお送りいたします。研究員の思いがさらに詰まったニューズレターをお楽しみください。

(P.D. 森本 幾子)

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業  
オープン・リサーチ・センター整備事業

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所

News Letter 「なにわがた難波潟No.4」

発行日 2006年9月15日  
発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所  
発行者 高橋隆博  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35  
TEL 06(6368)0095 Fax 06(6368)0092  
<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.html>  
E-mail naniwa@jm.kansai-u.ac.jp  
印刷所・編集協力 (株)廣済堂